



Umi Yama Caman Jyuku Report

2007 年度文部科学省生涯学習分野におけるNPO支援事業報告書
NPO 法人 YASU 海の駅クラブ

Contents

写真で見る「海山かまん塾」プロジェクト	3
情報提供用フラッシュ Web サイトと活動ブログ	4
海山かまん塾プロジェクト概念図	5
地域社会の教育力	6
海山かまん塾とは	7
スカイプ（ビデオ通話／通話／チャット）	7

「生涯学習分野におけるNPO支援事業」報告書

趣 旨	8
実施内容	9
スケジュール	10
実施体制	10
事業評価	11
原稿執筆者	14
海山かまん塾活動記録	15
受講生との関わりの中から感じたこと（英語担当者）	17
受講生のあゆみ（国語/海技指導担当者）	18
受講生の歩み（表現担当者）	21
ヨットセラピー	21
受講生の歩み（NPO事務局）	23
「つきあい」からはじまる（数学担当者）	24

写真で見る「海山かまん塾」プロジェクト（2007年度）



一人では決してできない炭焼き。一度、炭で真っ黒になるとなぜか作業に没頭できる。顔が炭だらけ同士、炭で生活していた時代の話年配の方から聞きながら交流が深まる。



校舎じゃない、山の中のレストランでの造形教室。自由でアットホームな空間にひとは引きつけられる。子ども達も和む空間を求めている。



海岸から山へ、海を一望できるスポットへ。ウォーキング・イベントは老若男女、様々な世代の人たちと対話しながら歩き、時を共有する。



海技専門指導員と共にダイビング。海の楽しさと危険性を熟知したスタッフのサポートがあり、マリンスポーツを身近に感じることができる。



海という大自然を直接感じる瞬間。緊張感と開放感が入り交じる中、地上でのいやな出来事がすべて忘却され、命あることの価値と自信を取り戻す。



シーカヤックマラソンに備え、カヤックの練習。人と呼吸を合わせ、自然と調和することを身体全体で感じる。



沖合い数キロに行くシーカヤックマラソン。マリンスポーツのNPO ならではのサポート態勢で上級者に混じって初挑戦する。体力的にもきつい競技だが、完走した充実感が自信につながる。



山仕事で最も体力のいる「木挽き」。機械に頼らず、摩擦熱で木目を駄目にしないスローな道具を、山の民に直接習う。筋力、忍耐力、洞察力を有する人に出会い、体験することは自らのモチベーションも高める。



自分で直接目にし、体験したことを人に伝える。文字にし、自分の言葉で語ることは容易ではない。スカイプを利用した在宅学習で国語担当者と準備を重ねて来た成果が試された。



手紙を利用した在宅学習で表現の担当者(怪人 N さん[右])との再会。ストーリー性のある教材作りが受講者を引きつける。文や絵の表現から内面を分析し、ありのままの自分を受け入れ、自己信頼を育む教授法を実践。



人の夢を壊す権利は誰にもない。農業高校に進学するため、学校で6時限までいるようになったが、問題は解決したわけではない。しかし、100枚の棚田を作り続けるおばあさんとの出会いが勇気を与えてくれる。



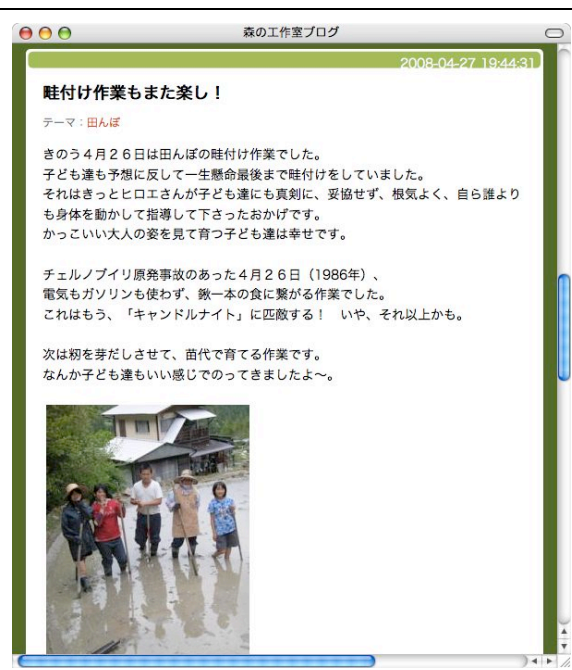
文科省の事業は終了したが、「かまん塾」は2008年春から田んぼ作りを地域の人たちの協力を得て、子どもたちと始めた。いろんなことを手作りですることで自信を取り戻し、いろんな人との協働で得られる達成感を求めて。

情報提供用フラッシュ Web サイトと活動ブログ



海山かまん塾 Web サイト

<http://equal-lab.org/caman/>

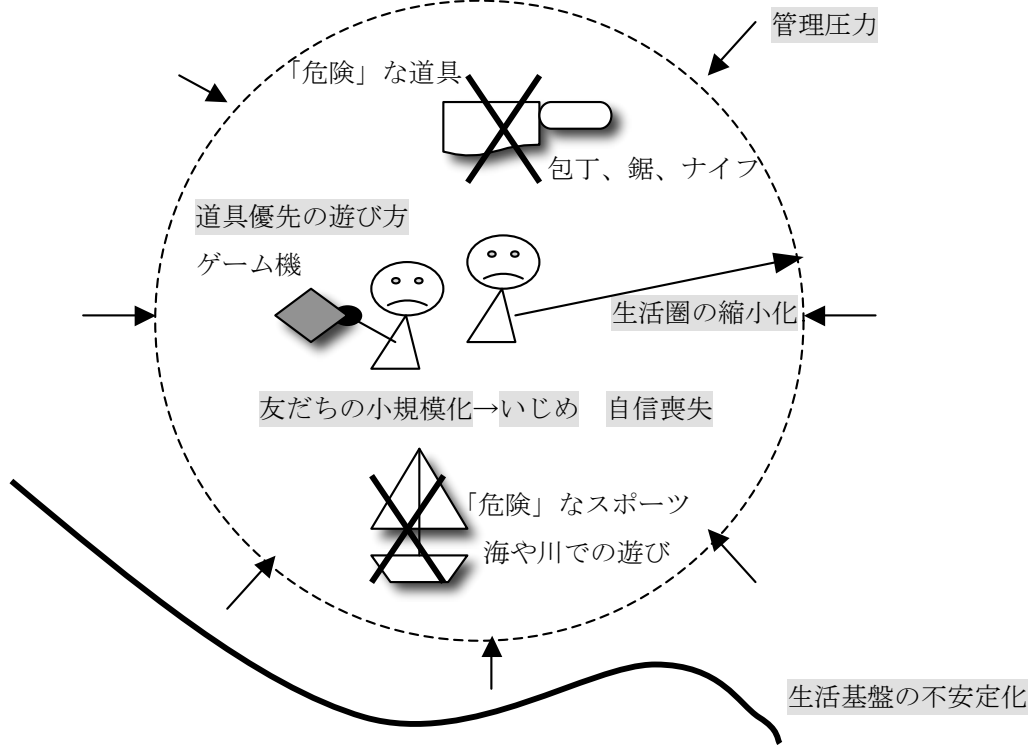


山の活動拠点/森の工作室 Weblog

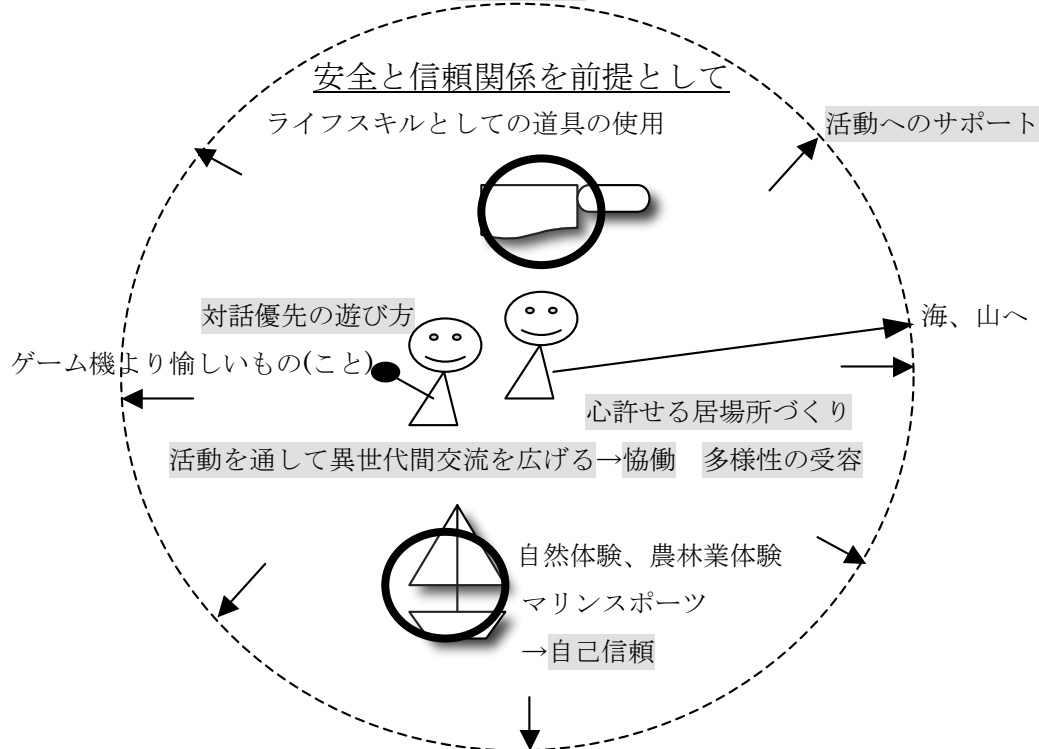
<http://ameblo.jp/mori-saku/>

海山かまん塾プロジェクト概念図

子どもを取りまく環境・・・ **現状**



かまん塾が提案する環境・・・ **目標**



社会に出た際にその地域で自立して生きて行くための基礎学力をサポートする

地域社会の教育力

- ◆ 若い人たちが多様な表現方法、ツールを用いて相互に働きかける能力
- ◆ 他の人とうまく折り合い、協力して作業したり、対立を解決したりする能力
- ◆ 物事を全体でとらえて活動すること、責任をとること、自分および自分以外の人の権利や限界を知るという能力

これは PISA(義務教育修了時の実力実態調査:Programme for International Student Assessment)を実施している OECD の教育目標である。簡単にいえば、自らの思いを表現し伝え、問題解決のために対話し、そして他人を理解するための教育を目標としている。しかし、多くの国(特に東アジア、北欧を除く欧米諸国)ではテストの点数で一元的に優劣を決めたり、目の前にいる子どもの内面の世界と触れ合わないで、一律的な知識の伝達が目的となっている。そのような多くの教育現場からいま様々な問題が噴出し、てきている。「いじめ」から「不登校」「自殺」と、他人をありのままに受入れることのできなくなった子ども達の世界(おとなの世界)がますます排斥の動きをエスカレートさせてきている。

「いじめ-不登校-学力低下-自己信頼の喪失-就業機会の減少-格差社会-格差の拡大と固定化・・・」といった悪循環が始まろうとする中、地域社会の一員として何かできないだろうか。そこで、行政、学校、民間教育事業者、NPO のパートナーシップによって地域に暮らす人々の協力を得て、「地域社会の教育力」を発揮する契機となればという発想でこのプロジェクトは始まった。



海山かまん塾とは

「いじめ」「不登校」「学習障がい」など様々な要因で学校での勉強が遅れがちとなり、点取りの下手な子ども達ほどおとな（教師）の助けを必要としている。そこで「学校以外の場」として、中高校生を対象とした支援（サポート）プロジェクトを開始した。インターネット（スカイプ）による在宅学習と地域における世代間交流やフィールド体験をリンクして実施するのがこの「海山かまん塾」である。これは、文部科学省の生涯学習分野におけるNPO支援事業（委託先はNPO法人YASU海の駅クラブ）を契機として、2007年8月1日に設立された。

今の子どもたちは、昔の子どもに比べ異年齢集団での遊びをしなくなり、遊び道具は経済的「豊かさ」を反映して数多くある。そして、子どもをとりまく環境もここ20年ほどで激変した。幼少時からの「友だちの小規模化」／誰と遊ぶかよりどんな道具で遊ぶかという「道具優先の遊び方」／自動車優先の道路事情や治安面から来る「生活圏の縮小化」／安全な遊びを指向させる大人からの「管理圧力」／経済的格差拡大に伴う「生活基盤の不安定化」など、家族や学校だけでは克服困難なこの状況を、地域で知恵を絞って少しでも改善し、子ども達に新たな環境を提供するために「海山かまん塾」は活動する。

スカイプ（ビデオ通話／通話／チャット）

スカイプの利用方法	<p>ネット環境を確認する（常時接続+Webカメラ+ヘッドセット） 「スカイプ」で検索し、無料のソフトを落手する スカイプ名とメールアドレス、パスワードを入力すると利用可能となる メールでテスト通話の依頼を通話相手に送信する メールの返信文にある日時にスカイプを立ち上げて待機する 呼び出し音で「応答」をクリックすると通話開始となる 話にくい場合はチャットを利用すると内容も記録されるので復習に利用できる</p>
スカイプ利用の利点	<p>自宅からアクセスできる ソフトの操作が比較的容易 多様なOS（Mac, Linux, Windows, PlayStation）に対応している 物理的な距離の制限がない 移動する必要がなく時間的拘束条件が緩い 常時接続の場合、基本的に無料でビデオ通話、通話、チャットができる メールやFAXのやり取りに比べ、タイムラグがなく双方向で意志の疎通が迅速 ビデオ通話の場合、相手の表情を確認しながら話ができる 発達障がいのある場合などでもチャット利用でストレスなくやり取りができる 同じファイルを共有でき、同時に開くことができる 最大5人まで同時通話ができる</p>
スカイプ利用の欠点	<p>インターネット環境（パソコン+常時接続+周辺機器）が必要なので利用者に制限がある パソコンのモニターを見てのビデオ会話は違和感がある トラブル（パソコン、ソフト、通信環境）発生時の復旧が容易ではない いわゆる「手取り足取り」のやり取りができない</p>

「生涯学習分野におけるNPO支援事業」報告書

主催 NPO 法人 YASU 海の駅クラブ
テーマ 「個から関係へ、協働を育む生涯学習支援事業」
実施期間 2007年8月1日～2008年3月20日

□趣 旨

背景

近年、いじめや不登校、壮年・若年層の自殺率増加などが懸念されている。この背景には社会全体を覆う人間関係の稀薄さが大きな要因として考えられる。様々な場面で行き詰まり、それらを乗り越える経験を積まないまま、PC ゲームなどの仮想空間上での「クリア」を繰り返す子どもたち。そんな彼・彼女らに人と人との関係を紡ぐ場を提供し、自己実現の力になりたいと考える。

必要性

子どもたちの抱える行き詰まりの一つに、学校での「勉学」がある。PISA(Program for International Student Assessment)によると学力の二極分化が近年顕著に現れている。特に、友だち関係などで学校を休みがちになる子どもの支援は困難さを増す。これは受験以前に、社会に出た際の基礎学力にも影響し、経済格差にも結びつく可能性がある。つまり、地域社会で自立して生きていく基底を確保するためにも、コアとなる「学び」が必要である。

連携方策

地域に目を向けると、自然に恵まれた地方では企業を退職した団塊の世代によるUIJターンが注目されている。これまでのキャリアと能力を活かして、地域の教育力に資する場を提供することが求められ、NPOをその中心に位置づけることをわれわれは提案したい。

方法

以上の背景を踏まえ、不登校生徒(中学以上)を対象に、「学ぶ」ことの「楽しさ」を感じてもらえる「在宅学習(学習添削・対面指導)」と、いろんな価値観をもった人々(サポーター)とのコミュニケーションを通した「スクーリング(カウンセリング)」、そして地域の教育力を活かした「フィールド(野外)体験」を実施する。それによって学校外での青少年の居場所作りと多様な人間関係を構築する機会を提供したいと考える。

効果

この取り組みの特筆すべき点は、自宅から外に出られない、或は、人とのコミュニケーションを拒絶する(ところにまで追い込まれてしまった)青少年とのコンタクトを、ネット上からでも始められないだろうかという発想にある。そこから、海上での開放感、山での共同作業、様々なおとなたちとの対話へと繋げて行くことを目指し、孤立感から脱し、自己肯定できるようになることを期待している。

□実施内容

「在宅学習」はスカイプ(ネットを利用したチャット、通話、ビデオ会議のできるソフト)で行った。受講者の興味に柔軟に対応しつつ、各講師が創意工夫した教材を用いた。講座は「国語」「表現」「英語」「数学」(40回実施)。ただし、「表現」は手紙のやり取りを受講手段とした。「スクーリング」は、海、山で実施(11回実施/そのうちフィールド体験が7回)し、受講者(保護者)と直接会話(カウンセリング)をする機会を設けた。そのうち「フィールド体験」では、地域の教育力を活かし、マリンスポーツの他、自然体験や暮らし体験活動を実施した。

具体的には、「在宅学習」では民間教育事業者イコールラボが、教員免許を持つ4人の講師に学習指導を依頼した。教科は、国語、表現、数学、英語の4講座とし、受講者との信頼関係構築を最優先課題とした。「表現」以外は、スカイプで対面指導を実施し、受講者との対話の中からモチベーションを引き出し、「学ぶ」ことの楽しさを感じてもらえるように工夫した。

受講者にはガイダンス時に Web カメラとヘッドセットの購入をお願いし、さらにスカイプの落手とインストールの方法を説明した。受講者の学習タイミング(話したい、知りたいというタイミング)に対応するため、講師側(海の駅クラブ事務所に国語担当者、イコールラボに英語と数学担当者)には常時接続のネット環境(ADSL と CATV によるブロードバンド環境)を整備し、受講者(あるいはその保護者)からのメールやスカイプにいつでも対応できるようにした。「表現」では、郵送による通信添削で手紙のやり取りという現代の若者があまりしなくなった通信手段を敢えてとった。

問題(テキスト)は、各講師が受講者に合ったオリジナルプリント等で行った。また、在宅学習講師には、スカイプや電話、スクーリングでカウンセリングも実施してもらった。これは、スクーリングの場で受講者とサポーター(NPO 会員や地域のおとな)、スクーリング参加者(一般および青少年)とをつなぐコーディネーター役を担ってもらうためである。在宅学習の具体的内容は「海山かまん塾活動記録」の表を参照。

スクーリングは、四国の自然と地域性を生かし、海山の両フィールドで実施した。「海」は香南市夜須町にある当 NPO(海の駅クラブ)を拠点とし、「山」は香美市香北町にある山の食堂「Hana」や徳島県那賀町木頭で環境教育に取り組む高齢者炭焼きグループ「おららの炭小屋」(<http://olala.jp>)などで行った。その際、NPO 会員や地域のおとなたちもサポーターとして参加。受講者とスクーリング参加者、そしてサポーターで様々な事業を実施した。各回の取り組み内容は「スケジュール」を参照。

地元教育委員会(香南市)には初期段階から事業について説明し、受講者の募集協力などの便宜をお願いした。また、事業の報告を校長(教頭)会などで行った。民間教育事業者(イコールラボ)には、在宅学習とスクーリングのコーディネーターを依頼した。その結果、事業を開始して間もなく、サポーター有志が「森の工作室」という、本事業(海山かまん塾)を継続的にサポートする趣旨の団体を 2007 年末に立ち上げた。会員は IU ターン者、林業者、農業者、店舗経営者、元学術

研究者(退職者)、建築家、学生、青少年施設指導者、公務員、教育サポーター、大学教員などで構成されている。当 NPO と連携をとりつつ、本事業を独立に継承して行く計画である。

この事業で特に工夫した点は、ネットの利用である。戸外に出ることが困難な場合や、時間的制約などの問題をクリアする1つのツールとして役立った。非営利の活動であるが故に時間的拘束をかけるわけにはいかず、個々人にあった場所と時間で、しかも安価に相互アクセスが可能である。従って、在宅学習受講者自体は1名であったが、9月～3月の7ヶ月で15回ものコンタクトが可能となった。また、事前打合せや会議の遠隔地参加でもスカイプを利用し、協力団体相互の意思疎通に非常に役立ち、事業経費の削減効果も大きかった。

海を主たるフィールドとする当 NPO は、ヨットやシーカヤックなどを通して公教育とはまた違った視点で青少年の教育に資すると共に、地域との連携をコーディネートする役割が今回の事業でも発揮されたと言える。

□スケジュール

実施時期	実施内容 (/参加人数)
2007.8.3	ガイダンス
2007.8.19	ガイダンス
2007.9.8	第1回スクーリング (顔合わせ/サポーター含め11名)
2007.9.9	第2回スクーリング (炭焼き体験/9名)
9月～翌年3月	在宅学習を随時実施 (受講者1名)
2007.10.9	第3回スクーリング (美術の時間、山里の伝統祭事見学/10名)
2007.10.14	第4回スクーリング (シーカヤック、シュノーケリング体験/6名)
2007.11.4	第5回スクーリング (シーカヤックマラソン/48名)
2007.12.1～2	第6回スクーリング (踏み臼、木挽き体験、合宿/のべ23名)
2007.12.16	第7回スクーリング (門松づくり体験/23名)
2007.12.28	第8回スクーリング (生活体験合宿/2名)
2007.12.29	第9回スクーリング (ヨットセーリング体験/2名)
2008.1.20	第10回スクーリング (体験合宿発表会/10名)
2008.2.17	第11回スクーリング (ウオーキング/37名)

□実施体制

(1) NPO法人 YASU 海の駅クラブの構成

氏名	職名	当事業における担当内容
丸岡克典	理事長	全体総括
浅野準仁	理事	フィールド体験
大坪英一	監事	フィールド体験
井土晴喜	専門指導員	連絡、国語担当、フィールド体験総括
沖濱政宏	事務局	サポーター総括、経理事務

(2) 実施協力機関（連携した行政や他のNPO、民間教育事業者）

機関名（代表者氏名）	機関の所在地	当事業における担当内容
香南市教育委員会 （教育長 島崎隆弘）	香南市夜須町坪井 270-3	事業広報、諸機関との連携ほか
イコールラボ（玄番隆行）	徳島県那賀町木頭北川前浦	事業企画、文科省連絡事務、在宅学習 総括（数学担当）、Web 広報
森の工作室（広部拓三）	香美市香北町岩改	スクーリング（山）、サポーター
おららの炭小屋 （会長 大城慶太郎）	徳島県那賀町木頭北川船谷	フィールド体験（施設利用、各種体験）

□事業の評価（実績評価）

(1) 成果・効果及びその普及内容

在宅学習受講者は1名だったが、スクーリングや野外体験ではのべ 181 人もの参加者、協力者（NPO 会員、サポーターほか）があった。8月当初のガイダンス時に受講希望の保護者から、学習障がいがあることを聞く。さらに 10 月のスクーリング時のアンケートで学校でのいじめの実態にわれわれはショックを受けた。不登校ではあったが、高知市教育研究所の方との信頼関係はあり、曜日によって研究所で授業を受けたりもする。しかし、登校できた日でも2、3時間目には帰宅する毎日であったという。

学習面では、ビデオ通話での講義も実施していたが、本人がチャットの方がやり易いということもあって、「国語」と「英語」でローマ字の学習から始めた。半年後の現在では難なくタイピングをこなせるようになっている。通話では少し複雑に話が込み入ると理解が難しいことがわかったが、それはこちらの話し方次第でもある。

当 NPO でのシュノーケリングやカヤックマラソンを通して、スタッフとの信頼関係が築かれ、2人乗りのカヤックやヨットでも他人との協調を学んで行ったと思われる。海に対する恐怖心はなく、海の上にいる心地よさをこの頃話すようになる。保護者との関係が良好ということは、本人にとって一番の「安心」要素である。次に、家族以外の信頼関係をいかに築けるかということが、今回の在宅学習時のカウンセリングや「近未来の楽しみ」であるスクーリングやフィールド体験でのより幅広い人々との関わりが重要となっている。

11 月のスクーリング時には、「いじめっ子に対しても広い気持ちを持てるようになってきた」と保護者は話されていた。俯瞰することができるということは、学校でのトラブルでもなんとかできる解決能力がついてきたのではないかと思われる。この頃、学校へは「フル出場」だった。

12月はじめの合宿で「隠れた問題」も発生したが、周囲の優しく、正直な対話で建設的な方向性を持つことも出来た。そして、事業も終わりかけの2月。ウォーキングイベントに参加して、「最近6時間までフル出場」という話を聞く。将来は農業高校への進学を考えているという。

このように、保護者、受講者との対話をスカイプやスクーリングなど頻繁に行うことで信頼関係が築かれ、多様なサポーター(おとな)との関わりの中で自信を取り戻しつつある中学生の姿が伺える。

他にも受講予定者(候補者)は2-3人いたが、結局コンタクトをとるまでには至らなかった。その内の1人は今回の受講者が唯一の親友でもあるという。中学校には一度も行けず、閉じこもりの状態であるというのだが、この事業を続けることによって受講者の彼がキーパーソンとなり、在宅学習やスクーリングに参加してくれる可能性もある。

地域の教育力については、いじめや不登校の問題を学校にだけ任せるのではなく、地域全体の問題として個人(サポーター)が関わることでできる場を提供できたことにある。また、地域の特性を生かして、都市部の青少年をより自然豊かな場所で、包容力をもつおとな(サポーター)と共に何気ない「対話」から「協働」で成し遂げる活動を実施することができたと考える。

(2) 事前評価に対する達成度合

受講者の数(少なさ)は予想に反したが、そのことが逆に関わりを深さを増すことで、われわれは多くのことを学んだ。また、参加者とサポーター、講師のモチベーションがこの事業で明らかに高まった。それは、当初予定していた在宅学習やスクーリングの回数が増えていることから裏付けされる。おとな(サポーター)には自らの時間(本業)を割いて参加せねばならないにもかかわらず、次のコンタクトの機会を全員待望していた。このことはプロ集団としての学校組織(教育機関)とはまた異なるアプローチが、NPO にはできることを意味している。わずか半年あまりの取り組みであったにも関わらず、実際に受講者は進路面で明確な目標(農業高校進学)をもつようになったことがその表れでもある。

(3) 実績評価の結果に対する今後の課題や問題点、その改善に向けた方策

まず、受講者を増やすための連携問題がある。公募活動に取り組む中で感じられたことであるが、NPO が教育問題に深く関わるのがまだ社会的に認知されていないことにもその一因があると分析する。今後は行政との協働も模索し、学校や市町村の教育委員会がかかえる不登校の生徒等を対象に、教育施設とともに事業を進める必要がある。教育を「家庭」「学校」の範疇だけで解決することはすでに限界に来ている。経済的背景を含め、国(政府、厚労省、文科省)、自治体(教育委員会)、教育機関(保育園-大学、研究機関)に対する市民の要望はいま、現場の最前線で働く教職員に集中している。(参考資料:今村克彦著「くたばれ学校-ある教師の24年

間の叫び))

「個から関係へ、協働を育む生涯学習支援事業」は、不登校の青少年のみを対象とせず、それぞれの立場で孤立する人々との関係性を重視し、地域で共に問題解決を模索するという姿勢が必要である。そのためにもより積極的に NPO が仲介者となり、学校と地域、こどもとおとなの連携をはかることが求められ、事業に対する認知度を高めなければならない。地域を巻き込んだ「対話」は、専門家による個別的なカウンセリングとはまた違ったアプローチの糸口にもなり得る。特に、地域で生活しているサポーターとの出会いは、既存の教科学習にはない、地域社会で「生きるための力」を学ぶチャンスでもある。スクーリングで関わったサポーターは、無理強いをするわけではなく、各人の得意分野において自然体で教えてくれる貴重な存在である。しかし、そのためにはスクーリングをコーディネートする人材が欠かせない。

今回の事業では、国語を担当した NPO の専門指導員などが通常の業務以外の時間(休日や夜間)を割いて「在宅学習」や「スクーリング」の準備にあたってくれた。受講生からの信頼が増すということは、同時に「対応」に追われるということでもある。今回の場合は、予算上の限界もあり、謝金としてカウントしなかった(できなかった)部分の方が多かった。それだけコーディネーターには負担が大きく、事業の成否がかかってくるということを共通理解しておかなければならない。従って、事業予算には、コーディネーターのための予算枠を別に設ける必要がある。

次に、柔軟かつ継続的な事業展開の問題。現在の青少年をとりまく環境は、その状況がめまぐるしく変化するので、柔軟かつ継続的な活動でなければならない。事実、今回の事業に参加してくれた受講者も、折角、高校進学「夢」を抱き、6時間まで学ぼうと努力はしているのだが、周囲の「いじめ」は止まず、その気力を持続させるには「転校」するしか方法はないと保護者は考えているが、本人は「今までの努力が無になる」と頑張っている。基礎学力を確保するためには、ある程度個別的にじっくり取り組む必要がある。しかし、日々の過酷な状況は「授業を最後まで聞く」ことすら困難なものにしており、修了式近くになって再び不登校となっている。(3月中旬のカウンセリング報告)

文科省委託事業としてはこれで終了だが、在宅学習カリキュラムの再考、カウンセリングの継続、スクーリング(3/26 に田んぼづくり作業を予定)を他の1人でも多くの「不登校」に追い込まれている青少年のために実施する予定である。そして、彼・彼女らを取巻く現実を地域のより多くの人々に理解してもらい、サポーターとして協力してもらえるシステム作りをしなければならない。

(4) 本事業の定着に向けた取組結果

本事業の3本柱である「在宅学習」「スクーリング」「フィールド体験」はそれぞれ、独立採算でイコールラボの「数学寺子屋」、地域有志で昨年末に設立された「森の工作室」、そして「NPO 法人 YASU 海の駅クラブ」へと取り組みを続けることとなった。

これからも当 NPO が行政と地域、民間事業者との連携をはかることを目指す。具体的には、各団体からの年間行事を相互に連絡し合うことと人的交流によって連携を図る。この事業で開設した Web サイトと相互連絡用のメーリングリストは、引き続き運営して行く。

かまん塾 <http://equal-lab.org/caman/>

数学寺子屋(在宅学習)<http://equal-lab.org>

森の工作室(スクーリング)<http://ameblo.jp/mori-saku/>

海の駅クラブ(フィールド体験)<http://www4.ocn.ne.jp/~yasu-umi/>

最後に、今年度の受講者は自主的に当 NPO の会員登録をした。これからは会員としてイベント準備等のスタッフに加わってくれる。当 NPO の活動がこころの拠り所であり続けるために、われわれは現代の子どもたち以上に努力しなければならない。

□原稿執筆者

氏名	所属・職名
沖濱政宏	NPO 法人 YASU 海の駅クラブ・事務局
名倉海子	香南市教育委員会・生涯学習課
井土晴喜	NPO 法人 YASU 海の駅クラブ・指導員
中條宏	塾講師(2008 年より大阪桐蔭中学高等学校教員)
玄番隆行	イコールラボ・数学寺子屋代表
玄番真紀子	イコールラボ・ルポライター

海山かまん塾活動記録

日付	内容	参加人数	場所	区分	備考
2007.8.3	打ち合わせ/ガイダンス		海		
2007.8.19	打ち合わせ/ガイダンス		海		
2007.9.3	打ち合わせ/Web 作成1		海		
2007.9.4	Web 作成2/チャット試行				
2007.9.8	カキ(顔合わせ)	11	海	スクーリング	
2007.9.9	炭焼き/カウンセリング	9	山	スクーリング	炭焼きの共同作業/友人関係について
2007.9.11	表現問題作成			在宅学習	状況設定の条件付作文課題作り・描画による表現力課題作り
2007.9.12	質問シート、数学テキスト作成			在宅学習	スカイプを利用して柔軟な幾何学的直感力を観る
2007.9.13	質問シート、数学テキスト作成			在宅学習	正負の計算力を観る
2007.9.14	国語問題作成			在宅学習	「漢字を読む方法」問題作り FAX にて送信
2007.9.14	英語テキスト作成			在宅学習	身近な英単語で「伝える」こと
2007.9.15	国語スカイプ			在宅学習	「漢字を読む方法」
2007.9.16	英語添削指導、テキスト作成			在宅学習	チャットのためのローマ字
2007.9.29	カウンセリング/数学スカイプ			在宅学習	スカイプの使用方法和チャットで近況報告、数学表現
2007.10.1	数学教材ツール作成			在宅学習	スカイプで図形解説用立体モデルの作成
2007.10.5	国語スカイプ			在宅学習	「漢字を読む方法」
2007.10.9	美術の時間	10	山	スクーリング	カウンセリング、立体造形で表現、伝統祭事の見学
2007.10.11	数学スカイプ			在宅学習	指で掛け算を求める
2007.10.14	シュノーケリング	6	海	スクーリング	カヤック(沈没4回)、シュノーケリングで自然体験
2007.10.22	表現問題作成			在宅学習	ナゾの怪人に仮託した手書き手紙問題作り
2007.10.26	カウンセリング/英語スカイプ			在宅学習	カウンセリング、ローマ字の学習
2007.10.28	表現添削指導			在宅学習	返信手紙への回答記入・問題提起
2007.11.1	国語スカイプ			在宅学習	シーカヤック体験インタビュー、チャット会話の学習
2007.11.4	カヤックマラソン	48	海	スクーリング	
2007.11.5	英語テキスト作成			在宅学習	数学記号の英語表現
2007.11.10	表現添削指導			在宅学習	描画2題への評価・コメント・分析記入
2007.11.10	カウンセリング/英語スカイプ			在宅学習	カウンセリング、数学記号の英語表現
2007.11.13	打ち合わせ		海		
2007.11.13	数学テキスト作成			在宅学習	数列を利用した簡易計算法、数学史(ガウス)
2007.11.20	数学スカイプ			在宅学習	算数の計算問題で高校数学の概念を導入
2007.11.23	表現問題作成			在宅学習	男子女子のセリフのやりとり問題作り・温暖化の描画課題作り
2007.11.27	国語問題作成			在宅学習	オンライン漢字ゲーム準備

2007.11.29	国語スカイプ			在宅学習	漢字ゲーム実施
2007.12.1	山里体験/カウンセリング合宿	15	山	スクーリング	大鋸で木工、踏み臼で精米の体験、カウンセリング
2007.12.2	山里散策/カウンセリング	8	山	スクーリング	合宿を通して自然観察と人間関係づくり
2007.12.2	表現添削指導			在宅学習	返信発言と描画へのコメント記入・問題提起
2007.12.6	カウンセリング/英語スカイプ			在宅学習	保護者カウンセリング、トラブルの修復について
2007.12.16	門松づくり/カウンセリング	23	海	スクーリング	保護者カウンセリング、思春期の問題について
2007.12.17	表現問題作成			在宅学習	連想による語句記入問題作り・選択語句組み合わせの描画課題作り
2007.12.17	数学テキスト作成			在宅学習	科学史(A.Einstein)から科学と社会の関わりについて
2007.12.18	数学スカイプ			在宅学習	科学者の業績と中学数学の関連、社会との関連学習
2007.12.28	体験合宿/カウンセリング	2	山	スクーリング	学校での生活状況
2007.12.29	セーリング	2	海	スクーリング	小型ヨットに乗船し役割を分担し共同作業体験
2007.12.30	表現添削指導			在宅学習	連想語句と描画への評価・コメント・分析記入
2008.1.6	表現問題作成			在宅学習	シナリオ問題手紙作り
2008.1.8	国語スカイプ			在宅学習	体験合宿 発表会資料作成指導
2008.1.15	国語スカイプ			在宅学習	体験合宿 発表会資料作成指導
2008.1.20	体験合宿発表会	10	海	スクーリング	体験合宿の様子をプレゼンテーション
2008.1.23	打ち合わせ		山		
2008.2.3	表現問題作成			在宅学習	ムーミン他とのやりとりでの自己セリフ記入問題作り・描画課題作り
2008.2.10	表現添削指導			在宅学習	返信セリフと描画への評価・コメント
2008.2.17	ウォーキング	37	海	スクーリング	カウンセリング
2008.2.21	英語テキスト作成			在宅学習	進路希望に沿う英語テキストの作成
2008.2.22	数学テキスト作成			在宅学習	進路希望に沿う数学テキストの作成
2008.2.24	表現問題作成			在宅学習	ムーミンセリフ記入問題作り・手紙課題作り
2008.3.7	カウンセリング			在宅学習	学習と進路についてのカウンセリング
2008.3.9	表現添削指導			在宅学習	返信セリフへのコメント記入・提出手紙への返事作り
2008.3.14	カウンセリング/スカイプ			在宅学習	受講者への進路についてのカウンセリング
	参加人数合計	181			

受講生との関わりの中から感じたこと

在宅学習「英語」「カウンセリング」担当 玄番 真紀子

受講生と最初に会ったとき、私が最初にイメージしていた「不登校の子ども」とはまったく違う印象を受けました。自分自身への否定感も感じられず、他者に対する攻撃性もなく、むしろもっと自分をわかってもらいたい、人と関わりたいという気持ちが素直に前面に出ていて、私自身が固定観念で構えすぎたことを反省しました。

英語担当ということでしたが、まずは受講者自身との信頼関係をつくることを第一に考えました。月1回のイベント等で顔を合わせ徐々にお互い気心が知れてくると、受講生と受け入れ側という関係を越えて、人と人との対等な付き合いが出来始めてきたように感じました。実際、様々な場面で受講生が私に気を遣ってくれていること、配慮してくれていることがあり、助けられた部分も多々ありました。このあたりは、保護者の日頃の子どもに対する接し方や、かまん塾への協力的な姿勢も大きいのだと、親子の関係や会話を聞いていて強く感じるどころでした。

ただ、当かまん塾で見る受講生の元気な様子とは裏腹に、学校で本人が他の生徒から受ける嫌がらせは一向に終結しないままで、登校してもストレスで体温が急激に下がってしまうことや学校における自己否定感などを聞いても、まだまだ問題は根本的に解決されてはいません。嫌がらせをする側も、何らかのストレスのはけ口としての行動であるはずで、また子ども社会は大人社会の写し鏡であることを考えても、病んだ社会を修復して行くには、行政、現場（学校）との連携も今後は不可欠ではないかと思われまます。

最初に述べたように「不登校」と一言で言っても、不登校の子どもの数だけの事情や状況の違いがあります。集団生活がどうしても難しい場合は、フリースクールや在宅学習などの手段も考えられますが、今回の受講生に関しては、対人関係を敬遠するよりむしろ人と関わりたいタイプで、学校へは出来れば毎日登校し友だちや教師とコミュニケーションをとりたい気持ちが強い。それぞれの子どもに対応するきめ細かさは、地域と密着し、小回りの効く NPO ならこそ実現可能だということも実感しました。これから、各地にこういう NPO が増えていくことを期待します。

「不登校」とは、学校に行けない子どもだけでなく、学校・社会全体の問題であることを再度認識し、不登校生徒側が変われば良い、強くなれば良いという誤った見解を払拭し、学校も、NPOも、行政も、同じ土台に立ち、謙虚にお互いが変わって行くことを前提に、本気で連携して取り組む時が来ているのではないのでしょうか。

受講生の歩み

在宅学習「国語」「海技指導」担当 井土 晴喜

事業全体を通じ、私は国語担当者として、海での指導者として受講生と関わってきた。関わりのなかでの彼の様子を報告する。

8月、申し込み説明会を海の駅クラブ事務所にて行った際、受講生と初めて会った。受講生はお母さんに連れられて来ていて、「お母さんにむりやりつれてこられた」とのことだったが、ふてくされた様子はなく、おびえている様子もなかった。がっしりした体つきで「タフ」な印象を持った。

スクーリングの説明をするなかで、四万十川を数日かけて下るカヌーキャンプに参加したこと、富士山に登ったことがあることなどが話題にのぼった。自分の話をするときは生き生きと話し、話に夢中になって主語が落ちることがよくあった。在宅学習について話すうちに、受講者の、学習に対する関心の薄さを感じた。また、漢字がほとんど読めないこともわかった。

国語担当として、上手に話すこと聞くこと、読める漢字を増やすことを目標とした。

9月、指導者との初顔合わせをかねてガイダンスを行い、海と山からの持ち寄りで一ベキューをした。受講生はコンロの設置をしたり、カキを洗ったり、手伝いを抵抗なくやった。一緒に準備をするなかで私と仲良くなり、肩を組んだりしてきた。互いの距離が近づくのではなく距離を詰めてきた、という印象を受けた。今後の活動のなかで、他者と関わる距離やコミュニケーションの取り方も教えていければいいと思った。

中ごろには初のスカイプを実施した。漢字の音を表す部分を見ればその漢字が読めるようになる、という説明をしたが、受講生に漢字の「部首」という概念がなかったため、漢字の構成の説明をした。受講生にとっては面白い話でもなく、理解している様子もあまりなかったが、がまんづよく聞いており、私が普段関わる夜須中学ヨット部の生徒よりも人の話を理解しようと聞くことが出来る、と思った。

10月、山のレストランで紙粘土を使い工作をした。オリジナルのキャラクターなどを次から次へと作り、イメージ豊かな一面をみせる。それ以外にも、母親の「あれ作ったら」という言葉に敏感に反応し、言われたとおりのものを作っていた。その後、山の奥の神社にて火渡りの神事に行く。玄番さんや私との距離が近く、さかんに触れようとする。好きな人には引っ付きたい気持ちはわかるが、ストレートに表しすぎて、学校では同級生に奇妙に感じられているのかもしれない。

同じく10月にシーカヤックとシュノーケリングの体験を行う。来月のシーカヤックマラソンに向けて操船方法、直進するための見通しの取り方などを練習した。途中で沈(カヤックがひっくり返ること)をしてなかなか起こせなかったが、あきらめず、弱音を吐かず、助けを求めず、もくもくと沈おこしに取り組んでいたのが印象的だった。最後には体験スタッフにカヌーをおさえてもらって復元し、再び元気に漕ぎ出した。シュノーケリングでは海底にあるキレイな貝をおかあさんにもって帰りたい、と異様なほど熱心にもぐろうとしていたが、うまく潜れなかった。水にたいする恐怖心は全くなく、こちらが心配になるほどだった。

私の職業についてさかんに質問してくるのはこのころである。「将来自分がここで働いてやってもええで」などとかわいいことを言う。学校へ行けないことがきっかけで、将来のことを考えることが多いのだろうか、学校に行く子供よりも将来へ目が向いている、と感じた。

2回目の国語スカイプはチャットにて漢字の学習を行った。受講生はローマ字の表を机の上に貼り、それを見ながら入力していた。9月にはローマ字もよくわかっていなかったのも、進歩が早い。タイプのスปีドも徐々に上がっていった。国語スカイプの内容は前回の続きを説明し、練習問題をした。この日も受講生は頑張って説明に付き合ってくれていた。

11月はフィールド体験としてカヤックマラソン大会に参加した。7kmの部に出場し、完走を果たす。10月のシーカヤック体験では沈をして自力で起こせなかったのも、完走してとても喜び、達成感に浸っていた。このころから、次のスクーリングの時期・内容についての質問をするようになり、積極的な参加姿勢が現れだした。

国語は11月中旬に2回行い、スカイプのチャットにて10月の体験、11月のシーカヤックマラソンのインタビューを行った。この学習の流れから、年始の合宿報告会に繋がっていく。

12月は門松作りを行った。講師の指導のもと、植木鉢に竹をすえつけ、梅や南天の枝を自由に生けて飾った。この頃はスタッフとして、他の大人や講師の人たちと一緒に会場の設営などの準備を行うようになった。受講生は社交的で、誰にも自然に接する

ことができる資質を持っているようで、この資質は事業を通してさらに磨かれていった。門松作りでは、講師の説明もそこそこに、自分の考えで門松を自由に飾っていた。

このとき、私が 11 月の末に夜須の山手へ引っ越したことが話題になっていた。それをきっかけに、年末に受講生が 1 泊 2 日で泊まりに来ることとなった。夕方から合流し、薪割り、風呂焚きをし、翌日はセーリングを行った。宿泊では、受講生のお菓子を食べ過ぎる傾向、寝る前に歯を磨かない習慣など普段見えない特徴がよくわかった。

翌日のセーリングではひとり乗りのヨットに 2 人で乗船した。私が舵を持ち、受講生が帆の調節を行ったが、帆の状態の見方、帆の調節の方法を教えると、すぐに出きるようになった。同年代の夜須中学ヨット部の子供に比べて、観察力が優れている印象を受けた。

海上は風速が 6m/s ほどで、2 人が協力しないと船がひっくり返ってしまう状況であったが、自分の役目を認識し、操船に協力していた。

1 月のスクーリングでは年末合宿の報告を行った。合宿時に撮りためた写真を使って、私の家の紹介を中心に発表した。受講生とは事前に 2 回スカイプを使って説明内容の打合せをした。「どう言えば伝わるか」をテーマとして、これまで行った国語スカイプの決算として取り組んだ。前回、前々回でのインタビューの経験が生き、説明内容を考えるのにもテーマを意識した発言が見られた。発表当日は事前打合せの成果を出す、というのが目標だった。受講者は始め緊張していたが、予定通り順を追って説明し、質疑応答でも受け答えがしっかりしていた。

全体を通して、国語担当者としては彼の話す力(特に話そうとする積極性)とその力の高まりを高く評価する。他の教授陣の指導や協力者の包容力が彼の気持ちを高めたとように思う。読み書きについてはまだまだだが、学習に無気力だった受講生が、現在は農業に関心を持ち、農業高校に進学することを目指して勉強に取り組んでいる。

体験指導者としては、受講者の社会的で協力的な資質を大いに評価する。惜しいのは受講生が一人きりだったため、同年代との関わりでの様子が見られなかったことである。現在、受講生は海の駅クラブに入会して自主的な体験イベント参加を始めているので、今後同年代の子と関わる機会があるだろう。

彼の成長を楽しみにしている。

「表現する力」は、年来の中学・高校の新指導要領において、国語科では最大の眼目であった大事な要素です。それを、学校内の一斉授業という枠内ではなかなか難しい個別的な対応によって、教科・科目カリキュラムといった制限に縛られない方法・内容で実践しました。受講生も、最初は途惑ったと思われそうですが、予想を大きく越えて応答・成長してくれました。

まず、初歩心理学ではある程度知られている「描画による表現力からわかること」を把握して、それを受講生にもわかる言い方で、率直に伝えてみました。定評ある「バウムテスト」(木の絵を描く)の描画分析などを、あまり堅苦しいテスト的なものではなく、気楽にやってみました。

あやしい課題に見えたのか、返送は遅かったのですが、他の科目指導者の力添えで提出がありました。結果を端的にまとめると、受講生の「力強い描画タッチ」を評価・賞賛しました。彼には、まだまだ眠っている自己表現への意欲が強いと感じました。反応がよかったので、それ以後も、課題の中に「描画」を随所に求めることになりました。

指導は、手紙のやりとりで一貫して行ないました。受講生は国語力にも自信がなさそうでしたが、それは「国語」担当者にお任せして、とにかく楽しんでやってもらいました。シナリオの中に登場する本人と、ナゾの怪人N(「表現」担当者)とのやりとりで、自分の発言部分の空欄を、自由にうめてゆくという形式です。こちらの想定を、いい意味で裏切ってくれて、想像力豊かな書き込みが少しずつ増えていったことが収穫です。学力では測りきれない、面白いワクワク感が生まれました。彼なら考えられると判断して、「環境問題・地球温暖化」という社会的テーマにもチャレンジしてもらいました。主体的に、自分のこととしてとりくんでゆく姿勢が見受けられるようになりました。たぶん、同時進行していた様々なフィールドワークやスクーリング、また「英・数・国」学習との相乗効果があったのでしょう。

相前後して、初めて彼と直接会いましたが、元気な男の子でエネルギーを持て余しているのがはっきりと感じられました。保護者やスタッフ関係者との対話にも、じゅうぶんに自己主張がありました。課題は、それをどのように表現してゆけるか、(特に同年代をはじめとする)他者に伝えてゆけるか、交流してゆけるかということです。そこで、イメージ連鎖という書き込みで、彼の連想力・想像力を他者(同年代の気分を意識した担当者)がどのように受け取るかを、彼に伝えました。多色ペンによって、絵や記号も

交えながらやりとりして、あれこれ考えてもらいました。後にお母さんに聞くと、それを楽しみにしていたようで、添サクという言葉では表せないものでした。

ゲームやカードなどに夢中になる年代の子ですが、自主操作してもらってその感想や遊び方を報告してもらおうと、リモコンミニカーを送りました。これはさほど興味をひかず、また壊れたままになり企画倒れでした。ただ、いかに彼らがふだん受動的に遊ばされているかということにも思い当たりました。しかし、この頃、セリフのやりとり(シナリオ)という劇(コントなど)の面白さを伝えたところ、ぜひやってみたい、アニメのムーミン役なんかどうかな、という話も出始めました。そうして終盤の、ムーミン谷(=受講生の8か月間という時間と空間)を舞台にした、登場する本人のセリフ部分をうめる、シナリオ作りになってゆきました。

2回分の往信返信でしたが、それぞれ4枚にわたる展開を、今までの集大成の意味もこめて、担当者との共同創作。彼は絵やセリフで存分にはじけてくれました。自主・自由な発想や、それを伝える・わかってもらうことの難しさと楽しさ、さらにその回答について考えを深めること。それは「表現」学習・指導の、本来めざすところです。そのまんな中で、彼と担当者は2回目の出会いを、フィールドワークのウォーキング大会で持ちます。歩いたり走ったり、話したり食ったりしながら、元気な彼が周りの人たちに(遠来の担当者にも)、さりげない気配りをしているのがとてもよくわかりました。それも、彼の「自己表現力の向上」であったことは言うまでもありません。もちろん、シナリオ作りの中でのセリフ表現力も、多彩に深化していました。

今後も、いろんな困難に負けず自己表現力を鍛えていってくれと、確信しています。

今回のかまん塾で、塾生の彼と関わる中で一緒に過ごした時間が最も長かったのは、海の上だった。主な活動はシーカヤックで、一緒にシュノーケリングでサンゴを見たりもした。印象に残っているのは、「サンゴの写真を撮って母親に見せたい。」と彼が言ったこと。

年頃の男の子にしては、恥ずかしがらずに言えることが少し意外だった。私たちと一緒に活動しているとき、彼はとても活発で外向的なので、学校でいじめられているというのが私にはピンとこなかった。もしかしたら、彼の素直な直球の感情表現が今どきの子どもの中では少し「浮いてしまう」のかもしれないな、と思った。

もう一つ印象に残っていることがある。それは彼が初めてヨットに乗った時のこと。その日は結構な風が吹いていて、彼は初めて会うクラブ員の大人と一緒にディンギーと呼ばれる小型のヨットに乗った。沖に出るとますます風が強くなり、離れたところから「大丈夫かな？」と心配していた。ヨットに乗った後、陸で彼に会うとすごく興奮した感じで「おもしろかった！」と目を輝かせて言っていた。

私は色んな人と一緒にヨットに乗る機会があるが、特に身体、心、問わず障害をもった子どもと一緒に乗ると、表情がパッと変わることに驚かされる。予想ではもっと怖がって嫌がるかと思っていたても、ほとんどの子どもは目を輝かせ、表情がすごく明るくなる。以前ダウン症の子どもと一緒にヨットに乗ることになったとき、「海上で興奮して引き付けを起こしたらどうしよう。」と心配になり、多くの障害者にヨットの楽しさを教えている知り合いに聞いてみた。

「僕が今まで行った事業の中で、精神的な障害をもつ子どもがヨットの上で引き付けを起こしたことはない。」という答えだった。「自分のことを考えてごらん。」と言われ、自身のことを考えてみると、確かに嫌なことがあったりしても、海の上に出るとなんだかスツとしたり、ただ波の音を聞いて眺めるだけで心が穏やかになる。「脳からα波が出ている。」とその人は教えてくれた。科学的な根拠はないけれど、私も今までの経験上、それについては確信めいたものがある。塾生の彼が今後ヨットに関わっていくかどうかはわからないが、いつかこのヨットセラピーが彼以外の誰かにも役に立てばよいのにな、と思う。

最後に今回彼との出会いによって、今学校では「どんな子どもが不登校になる、とかいじめられるか」ということは、大人には予想されるものではなく、

本当に千差万別のケースがあるのではないかと、思うようになった。だから、学校現場や教育委員会だけの取り組みではなかなか改善されないのではないかと。今回の取り組みの成果がすぐに何かの形になって現れることは難しいかもしれないが、色んな分野のスタッフが連携を取りながら彼と関わることができるNPOという組織が大事な役割を担う可能性を感じている。

受講生の歩み

YASU 海の駅クラブ事務局 沖濱 政広

海山かまん塾開講に際し、自己紹介兼ね受講生と初めて会った時の印象では、中学生の割に情緒未熟で神経質な傾向あり、依存的で対人緊張が高く、自己主張の強い我がままな子ではないかと思いました。登校拒否にもいろいろなタイプがある様ですが、受講生との対話から推察するに、学校生活(学校や教師への不安、不信、生徒間の嫌がらせ等)に大きく起因するのではないかと印象を受けました。

登校拒否の児童は、どちらかと言うと無気力で、情緒的にも不安定な子が多いとの先入観を持っていましたが、彼の場合は自分の興味のある事(特にマリンスポーツ)には非常に積極的でした。

例えば、昨年10月カヤック体験教室に参加した時は、事前準備としてカヤックを艇庫から出すのを嫌がらず手伝い、乗る前の指導員からの注意事項も真剣に聞き、パドルを漕ぐ時は目を輝かせ嬉々としてやっていたのが印象的です。

早速体験教室の経験を活かし、11月開催のシーカヤックマラソン大会には、中学生の部7Kmコースに参加してもらいました。競技後本人より、ひそかに上位入賞を狙っていたが練習通りには事は運ばず、途中で腰や腕が痛くなり棄権しようかと思ったが、最後まで頑張り完走出来たと誇らしげに話していました。

この頃になると、気心が知れた人に対しては、表現力は十分ではありませんが、自分から少しずつ話しかけるようになりました。12月半ば新年を目前に控え、お年寄りも交えた「ミニ門松作り」に母子共々参加いただきました。

学校の集団生活では味わえない、いろいろな年齢層の多様な価値観を持った人達と一緒に物作りをすることで、理解力の向上や多様な物の見方が少しは出来たのではないのでしょうか。

年末指導員宅で合宿した報告会を1月開いた時は、本人がデジカメで撮影した写真を参加したスタッフの前で見せながら、家のレイアウト、周囲の状況、夕食作り等、貴重な体験を聞かせてくれました。言葉数は決して豊富ではありませんでしたが、なかなか見事なプレゼンテーションでした。

2月には、平均参加者年齢60才の中で、最も若い一人として早朝から10km近くのウォーキングに参加してもらいました。当日は天気も良かったので、海が見える海岸コースから小高い山へと変化に富んだコースを皆様と共に歩き、大自然の中を心地よい風をうけながら歩くことの素晴らしさを、体験できたものと思います。

約8ヶ月余りの短い期間でしたが、学校生活とは異なった体験を通じ、いろいろな人々と出会い、海という大自然の中で少しはパーソナリティの成長と発達に役立つことができたのではないかと考えています。

今後は、当クラブの会員になったのを機にいろいろのイベントに参加頂き、そのなかで自己の目標を見つけ自立した人生を送っていけるようになることを心より祈っています。

「つきあい」からはじまる

在宅学習「数学」担当 玄番 隆行

糸がもつれ、ヤケになって糸を引っ張れば引っ張るほど、結び目は固く締まって行く――いま、この世の中で生じている人類が抱える問題も同じような感じだと思うのです。糸は切れておしまいますが、人類の場合は幾世代にも禍根が残り、立場の弱い人たちが最も悲しい目に遭うのです。

対等な人間として向き合う感性をもっているかどうか。こころの成長とはそんなことにあると思うのです。知恵や知識も、より広い視野でものごとを見たり、感じたり、考えたりするためにあるのではないのでしょうか。それがいつの間にか競争原理のツールに格下げされてしまいました。既成概念を打ち壊し新たな知の地平へと止揚するための貴重な文化財産として見直す必要があります。

今回、NPO法人YASU海の駅クラブが文科省から委託を受けた事業は、糸のもつれ

の事実を知り、切り捨てられたり、封じ込められたり、雑な扱われ方を経験した子どもたちと「つきあう」ことから始まるのだと思います。そして、生きるための基礎となる知恵と知識を競争原理を抜きにして「学ぶ」ことにあります。

まず、このような事業をこれからも意味のある形で続けられるように、委託元である国（文科省）に対して、対等な立場を築くためにあえて述べさせていただきます。昨年8月に募集活動を開始しましたが、文科省担当者の非常に前向きな姿勢とは逆に、政界混乱の余波なのか、委託決定の通知は遅れ、財務省による委託費の概算払い決定も大幅に遅れての船出となりました。本当に実施していいものかと、二の足を踏む関係者の面もちを幾ばくかは想像して頂きたかったと思います。NPO との連携事業は非常にいい発想であるにもかかわらず、もつれたロープを末端にまで持ち込み、影響を与えるということは、その責任の所在をはっきりさせてこなかったことにその原因があります。

事業を円滑に進めるためには、現場で働く(活動する)当事者の意見をよく聞く必要があります。情報を公開することで不正を防止し、本当に意味のある事業には公的なバックアップ体制をとってもらいたいものです。学校現場でもそうですが、「上」への報告のためだけに事務作業量を増やすことは根本的な解決にはなりませんし、返って子どもたちと向き合うおとなの数を減らすだけです。もっと、インタラクティブな方法をとることの方が建設的だと思います。さらにもう一点。NPO の活動は、「生きる価値」を求めて集う市民がいてはじめて成り立つものです。それを経済効果だけで連携を考えるのは誤りです。ここにも対等な関係を両者で模索する必要があります。スカイプなど、近年のネット技術をもっと活用したり、現場に足を運ぶなりして、相互理解の出来る風通しのいい協働の形を作って行きましょう。

次に、NPO の役割についてです。おとな同士のつきあいにも組織が絡むとその立場でものを言ってしまう、ギクシャクすることが多々あります。子どもの世界でも、おとな社会の影響下でこころの中は本人にもわからないくらいにもつれているのでしょう。どの糸が原因なのかより、全体を見てほぐす作業が肝要です。ではいったいどこまで見渡せばよいのでしょうか？学校の領域、家庭の領域、地域社会の領域、プライバシーとの絡みもありますが、今回のような事業では保護者(受講者)との信頼関係を構築することと、地域社会の一部でも関わることに意味があると考えます。しかし、社会的に教育は学校と家庭で行うものという固定観念があり、まずは NPO が今回のように文科省の委託を受けることによって少しは前に進むことができます。今後、様々な NPO が地域と学校をつなげ、塾とゲームに明け暮れる子どもたちの視野を、地域の持ち味(文化)や自然環境に広げさせ、多様な活動が盛んになることが期待されます。

最後に、この委託事業から生まれた「海山かまん塾」という子どもとおとなの集いの場について。

人類の歴史が本当の意味で進歩するとはどういうことなのか？科学技術がいくら進歩しても、飢餓や紛争、抑圧がそのままにされる世界が進歩と言えるのか、しあわせといえるのか？近年、環境という糸も絡み、自然とのつきあい方を忘れそうになっている人類ののど元にこの糸は深く食い込んできています。従って、これまでの知識の詰め込みと管理の強化では、これらを乗り越えるためのひとは育ち得ないと思うのです。一定の知識や概念をすでに完成したものとして子どもたちに伝えることから脱却しなければなりません。「感性」「洞察力」「想像力」。それらを豊かにするためには受け身の教育を終らせることです。じっと50分間の授業が聴け、出された宿題(それも業者のプリント)を黙々とこなす子どもを育てることを目標とはせず、学習障がいや身体に障がいのある子どもから学ぶのです。多動が問題と言われるのは、先進国のうちで教育がなおざりにされている国だけなのではないでしょうか。許容度のない社会が、子どもたちのいのちを奪ってきていることに早く気づくべきです。教育に携わる人々を物心両面でサポートし、子どもと「つきあう」おとなを増やすことです。

人が成長するとは、身近な障害を誰かに助けてもらいながらひとつずつ乗り越えて行くことです。かまん塾の場合、子どもから多くのことをおとなは学びました、助けてもらいました。これからもそれは変わらないでしょう。おとなは子どもよりほんの少し「表現」する技術に長けているだけです。人を騙すのも子どもたちはおとなたちにはかないません。公な場でも平気で嘘を言います。おとなも本当は、子どものときの気持ちを失いたくはないのです。海や山で仲間と一緒に「巣寄り」たいのです。

日常とは異なる「つきあい」を子どもたちとしてみようと思うおとなは是非、かまん塾に加わって下さい。「子どもの頃、悪ガキだった」というおとなは大歓迎です。子どもたちと一緒にあなたのこれまで培ってきた生きる術を教えてください。そして、いろんな仕事をしていまを生活しているおとなと話したい子どもは寄ってください。

「海山かまん塾」Web サイト: <http://equal-lab.org/caman/>

NPO法人 YASU海の駅クラブ

2004年 設立 2006年 法人化

設立当初から、マリンスポーツや自然体験活動を通して、
青少年の健全育成や豊かなまちづくりを目指し活動しています。

一緒に活動してくださる会員を募集しています。

〒781-5602 香南市夜須町千切 536-19

tel&fax 0887-57-1855

E-mail : yasu-uminoeki@shirt.ocn.ne.jp

<http://www4.ocn.ne.jp/~yasu-umi/home1.htm>

